



ギャラリートーク要旨

# 聖書挿絵を「読む」



神学部教授 水野 隆一

## はじめに～基本の物語とその語り直し

ご紹介いただきました関西学院大学神学部の水野隆一と申します。ヘブライ語聖書（旧約聖書）の物語の解釈を専門にしております。

ご存知のように、聖書はヨーロッパやアメリカの文化の根底にある基本の物語で、今もなお非常に強い影響力を持っています。それに比べると、私たちの日本の社会は基本の物語を失いつつある、あるいは、失ってしまったという気がします。アメリカやヨーロッパでは、弱くなったとはいえ、まだ基本の物語として、聖書は力を持ち続けています。

基本の物語であるということにはいろいろな意味がありますが、1つはさまざまな語り直しを生み出していく物語であるということです。キリスト教の聖典ですから、当然、神学、つまり信仰に基づく解釈、また、それを根拠にした倫理的な教え、総称して「教義」と呼んでいます。そのような形で語り直されます。この後お話しします洪水物語は、この神学によって、教義の物語として語り直されます。

ところがそれだけでなく、芸術、いわゆるハイカルチャーと呼ばれる美術や文学や音楽、ポップカルチャーなどを通して、語り直しされていくことになります。ポップカルチャーに映画を含めていいのかどうかは議論があるところかと思いますが、映画や、あるいは漫画などにも描かれます。

例えば映画の話をしますと、2014年の夏前に上映された「ノア 約束の舟」という3時間以上の長い映画をご覧になった方もあるかと思います。私も大変興味深くあの映画を見ましたが、そういう形での語り直しが常に行われています。

神学、教義の側、つまりキリスト教会には、聖書の読み

方をコントロールしたがる傾向があります。「こういう読み方をしなさい」、「この物語からはこういう教えを導き出しなさい」、というように。それに対して、芸術はそこから自由になろうとする傾向があります。もっと言えば、芸術家の才能が、物語を読んだときに、それまでの教えに縛られないものを読み出していくというのが正しいのでしょうか。そして、読み出したものを芸術作品に描いていきます。

例えば、先ほど言及した「ノア 約束の舟」は、私の見るところ、とても厳しいキリスト教批判の映画でありました。このことについては、また後でお話しします。

また、カラヴァッジョの絵は、何度か教会から受け取りを拒否されています。教会側にしてみれば、お金を出して依頼しているのに、出来上がった作品に自分たちの公式の解釈と異なる解釈が描かれていたということで、何度か受け取りを拒否されたりしています。それくらい、芸術家は自由に聖書を解釈しているわけです。

これまでは、聖書学という学問の世界でも、学問的な解釈が優れていて、芸術による解釈は一段下に見られているか、もしくは学問や教義によってコントロールされなければならないものと考えられてきましたが、20世紀の後半になって考え方が大きく変わりました。

それは、読み手が物語を読んで語り直すものに優劣はないという考え方が、文学批評の世界にあって浸透してきたからだだと思います。学問の世界では学問的な解釈が素晴らしいと思っているけれど、それは学問の世界から判断したものであって、それ以外の、象牙の塔の外側の芸術やポップカルチャーによる解釈にも見るべきもの、傾聴すべきものがあるということが認識されてきたのです。現在の研究者

たちの中には、さらに進んで、この芸術やポップカルチャーで描かれている聖書の解釈から、新しく、学問的あるいは教義的な解釈への影響を読み取っていこうとする人たちが生まれてきています。

この展示会の企画に併せて聖書の挿絵を取り上げたのは、今申し上げたような、教義的な解釈と芸術家による自由な解釈の間の、緊張ある関係を見ることができるからです。この展示会で展示している聖書の中から、次の4点を材料として取り上げています。

1. 『ルター訳聖書』（1534年の復刻版）
2. 『ウルガタ挿絵入り』
3. マクリー社刊『銅版画挿絵入り聖書』
4. ハーパー社刊『挿絵入り聖書』

そして、展示にはありませんが、次の3点を取り上げます。

5. *Figures de la Bible*, 1728
6. ギュスターヴ・ドレによる聖書挿絵
7. ディック・ブルーナ『ケムエルとノアのはこぶね』

挿絵は聖書本文の横に描いてありますから、絵画が本文をどう解釈するかを分かりやすく見せてくれます。例えば、『ルター訳聖書』と『ウルガタ挿絵入り』という2冊については、当時の、『ルター訳聖書』の場合は宗教改革側の解釈、『ウルガタ挿絵入り』の場合はカトリック教会の解釈を色濃く反映したものになっています。教義が芸術をコントロールしている絵になっています。ところが、それから時代が下ると、教義によるコントロールがだんだんと弱くなっていった、自由に解釈し始めています。そういう変化も見えていただければと思っています。

また、聖書の物語を絵画にした人たちはとても自由に解釈を表現しましたが、絵画を見る者はそれ以上に自由です。文学作品を読む以上にいろいろな解釈ができます。私が今日お話ししているのも、これが絶対の解釈ではありません。いや、そうではなくてこう読んだほうがおもしろいということがありましたら、ぜひお聞かせいただきたいと思います。

## 1. 人間の「悪」

世界を滅ぼすような洪水についての物語は、ギリシャやメソポタミアをはじめとして世界中にあります。聖書では冒頭の書物、創世記の6章から9章に記されています。人間の悪に心を痛めた神が、動物もろとも人間を滅ぼし尽くそうという計画を立てた。ところが、ノアだけを「義人」と認めて箱舟を作ることを命じた。全ての動物のつがいとノアの家族が箱舟に入って、洪水によって生き物が滅ぼされた後、新しい世界での人間と動物の祖先になった。簡単に言えば、こういう物語です。

聖書の物語はメソポタミアの物語の影響を受けていると考えられていますが、聖書の洪水物語にはいくつか特徴があります。それは何よりも、洪水を起こすことになったきっかけが人間の「悪」であるということです。「主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた」と記しています（創世記6章5～6節）。

「全知全能」で絶対と考えられている神が、「しもた、人間を造るんやなかった」と思ったというのです。読み過ぎられてしまいがちですが、これは、驚くべきことを言っていると思います。メソポタミアの神話では、神々は人間の余りのやかましさに、あいつらを滅ぼしてしまえと思ったと書いてあるのですが、「心を痛めた」つまり「後悔した」という表現はとても刺激的だと私は思います。

ところがこの記述には問題があって、人間の「悪」について具体的な言及がありません。私たちは確かに人間の「悪いこと」といわれると、ぼんやりとイメージすることはありますが、聖書という書物は人間の悪について割と厳格な書物で、「これが悪である」と具体的な事例を挙げて定義する傾向があるのに、ここではそのことについて何も触れていないのです。「人間は悪い」と、これだけしか書いてありません。それも「一日中」悪いと言うのです。「常に悪いことばかりを心に思い計っている」の「常に」という言葉は、元々、「一日中」を指します。

これも、とても極端な表現だと思いませんか。皆さんはどうでしょう、一日中悪いことを考えていますか。あるいは一日中良いことだけ考えていますか。そんなことはなくて、良いことも思えば悪いことも思うのが、人間のはずです。

ちなみに、その「人間」とは誰でしょう。これも特定されていません。このあたり、とても曖昧な表現で人間の悪が指摘されています。ですから、聖書挿絵が人間の悪を描くときも、いろいろな方法をとることになりました。

例えば、*Figures de la Bible* <sup>[図1]</sup>では、洪水の前の人たちの姿が描かれています。向こうのほうに棒が立てられていて、その上に飾り物があって、いわゆる聖書の神以外の神を拜んでいる姿です。その下で手をつないで踊っている人たちの姿があります。18世紀のヨーロッパ人にとって、



〔図1〕 Gerard Hoet et al., *Figures de la Bible* , 1728

これはとてもスキャンダラスなことだったのでしょ。

前景へ来ますと、女性がブドウを持っていて、酒に酔うことが表されています。そして、男性と女性が人前で抱擁し合っている姿がある。酒に酔ったことによって、放縱なことが行われている様子が描かれています。

この奥のほうで、複数の男性が1人の女性を追いかけています。女性に対する暴力も悪だと考えられているということです。あるいは、ここに子どもたちがいるのですが、こ

の子どもたちも楽しそうに遊んでいるのではなくて、食べる物があって、それを貪り食べている。この絵では、「悪」と聞いて私たちが何となく思い浮かべるものを描いていると言えるでしょう。「悪」が、18世紀にはこう解釈されていたという1つの例です。



〔図2〕『ルター訳聖書』創世記7章挿絵

次に、『ルター訳聖書』の挿絵 <sup>[図2]</sup>ですが、洪水が始まって、水かさが増してきてきた場面で、「悪」を描いていると思います。例えばこちら <sup>[図3]</sup>は、1人の人が木の上に登って、同じ木に登ってこようとする人を木の枝で追っ払っています。芥川の「蜘蛛の糸」の話のようなことが起こっている。自分の身のためには他の人は犠牲にする。そのようなことが「悪」だと考えられている。随分と倫理的な解釈



〔図3〕『ルター訳聖書』創世記7章挿絵（部分拡大）



がされていることがお分かりいただけるかと思います。

ディック・ブルーナ『ケムエルとノアのはこぶね』では、毛虫が主人公で、名前をケムエルと言います。この作品では、「ところが、ちじょうには にんげんもいて、にんげんたちは、あらそってばかりいました」という文章のところに、2人の男の人がこん棒を持って争っている姿が描かれています。具体的に、暴力が「悪」とであると解釈されているのですが、これは現代的な解釈だと思います。

人間の暴力の結果、草も木も葉を枯らすという絵が続いていますが、自然が人間の「悪」によって破壊されてしまっている。人間の「悪」によって自然が破壊されるとするのには、現代的な感覚が反映されていると言ってよいと思います。

続いて、「ちきゅうをつくり、けものたちをつくり、にんげんをつくった かみさまは、おいかりになりました。そして、すべてを おわりにして、ちきゅうを きれいにあらひ、もういちど あたらしくはじめようと、きめました」と書いています。

## 2. ノアの「義」

その人間の悪に対して、ノアという人が出てきます。「その世代の中で、ノアは神に従う無垢な人であった」という記述があります(創世記6章9節)。「神に従う」ことをキリスト教の用語では「義」と呼びますが、「義」とは何かというと、契約に基づいて行動するということです。倫理的な事柄も含まれていますが、もう少し幅が広くて、神を信じる者ならばこういう生活をしなさいという項目があって、その項目を満たすように生活しているということです。

私たちにはピンと来ませんが、一番近いのが、ヘブライ語聖書から生まれた宗教のうちの1つであるイスラムを信じる、ムスリムの人たちが守っているあの生活を思い浮かべていただいたら良いと思います。倫理的内容ももちろん含まれます。それだけでなく、例えば日に5回マッカに向かって礼拝するというようなことも含めて、行うべき項目を果たすよう行動するのを「義」といいます。ですから、人間の悪を倫理的な事柄として解釈していた挿絵は、「義」を狭

く考えていたということができるかと思います。

ところが不思議なのは、まだこの時点では何をすれば正しいのか、「義」と認められるかが示されていません。本というのは、通常、最初から読むものですが、こうすることが正しい、「義」とであると書かれるのは、これからまだずっと何十ページも先になってです。

では、ノアはどうやって「正しい人」と認められたのか。これは大きな問題として存在しています。ですから、ノアの「義」についてもいろいろな解釈が行われてきました。

「無垢」と訳されている言葉は「完全」とも訳することができます。「完全」とであるというのは、神が命じたことをすべて、そのとおりに実行している、完全にしていたということです。

そうしますと、ますます何をもって完全な人だと認定されたのかよく分からないことになります。基準が明示されていないのですから。人間一般の「悪」と対照的にノアは「義」、正しい人と言われているわけですが、「悪」が曖昧で抽象的であったように、ノアの正しさの描写も曖昧で抽象的だと言えることができるでしょう。

「天地創造」という映画が1966年に作られました。そこで描かれていた人間全体の悪は、「野蛮さ」というような、どちらかといえば文化的な偏見を含んでいると思います。ですから、今見るととても問題のある映画であるといえるでしょう。その中で描かれるノアは、人々の嘲笑にも関わらず、神が命じた箱舟を作っている、神が命じられたとおりに実行している人物と描かれています。キリスト教の中で一般的な解釈であろうかと思います。

『ウルガタ挿絵入り』<sup>[図4]</sup>を見ていただきますと、箱舟が出来上がっていて、動物たちがつがいできてきています。画面左にノアが大きく描かれています。その上に描かれている、王冠のような物を被っているのが神です。神は全世界を支配すると考えられていますから、このように王冠を被った姿で描かれることがしばしばあります。

ノアは上を見えています。つまり、ノアと神との間にコミュニケーションが成立していることを表しています。これが重



〔図4〕『ウルガ挿絵入り』創世記6章挿絵

要です。つまり、神の命じられていることを聞くことができ、しかも、それを実行するということが、ノアという人物を表す図柄として用いられています。ノアの「正しさ」を『ウルガ挿絵入り』はこのような表現するのですが、これは古典的、典型的な解釈だと言ってよいと思います。

ハーパー社刊『挿絵入り聖書』<sup>〔図5〕</sup>を見ていただくと、これ以前の挿絵と視点が違うことが分かります。16世紀の絵ですと、物語を全体として俯瞰するところに視点がありますが、19世紀のハーパー社刊聖書になると、視点が情景の中にある。つまり、見ている者もこの中にいます。上から物語を見ているのではなくて、この物語の中にいるというのが1つの特徴であると思います。

しかし、変わらないことが1つあります。それは、やはりノアが上を向いているということです。上から光が差しています。じかに神の姿は描かれていませんが、これは神と



〔図5〕ハーパー社刊『挿絵入り聖書』創世記7章挿絵

のコミュニケーションが成立しているという伝統的な図画です。他の人は聞くことができないのですが、その証拠は、ノアの息子たち、その妻たちが上を向いていないというところにあります。ノアだけが上を向いているのは、ノアだけが神の声を聞いていることを表しているわけです。

遠くに箱舟が見えています。ノアに差している光は箱舟にまで届いていて、この箱舟が神の特別の配慮の中に存在していることを表しているといつてよいと思います。

### 3. 生き物の滅亡

洪水が来て生き物が滅びます。「地上で動いていた肉なるものはすべて、鳥も家畜も獣も地に群がり這うものも人も、ことごとく息絶えた。乾いた地のすべてのもののうち、その鼻に命の息と霊のあるものはことごとく死んだ」(創世記7章21～22節)。先ほども言いましたけれど、悪というが誰が悪いのか。つまり、責任があるのは誰かということが問題になります。

人間の悪で動物も滅ぶ。21世紀に生きている私たちは、人間の活動によって地球環境が危機に瀕していることを知っていますので、聖書の記す滅亡を現代的な関心で読みますが、この物語を書いた古代の人たちは、人間の経済活動で地球が減びることは知りません。ひょっとすると耕作地を広げ過ぎたらひどいことになるぐらいは分かっていたかもしれませんが。

現代の私たちは、何となく、人間の悪のゆえに動物がみんな滅ぼされるというのは、環境問題と併せるとそう考えられるとしても、本当にそんなことが起きていいのかという疑問を持ちます。それと同時に、人間の中でもみんなが一樣に悪いのかという疑問を、古くからいろんな人が持ってきました。「人間が心に思い計ることは、一日中悪い」というのは余りにも大ざっぱな定義の仕方で、大ざっぱな判断の仕方ではないのかと感じます。

ハーパー社刊『挿絵入り聖書』<sup>〔図6〕</sup>では、やはり視点は人間の側にありますが、滅ぼされている人たちが、みんな同じ高さにあります。この絵では、箱舟に関心はありません。



【図6】ハーバー社刊『挿絵入り聖書』創世記8章挿絵

箱舟がどこにあるかすら分かりません。これが箱舟かと思うものもありますが、周りの岩も同じように描かれています。箱舟か、それとも岩の一部なのかははっきりしません。

私には意味が分からないものがあるのですが、ここに一筋の光が差していますでしょう。これは何を表しているのかよく分からない。1つの解釈の可能性としては、滅んでいく人たちが同じところにいるのは、逆に言いますと、誰もみんな平等に責任がある。誰か一部の人だけが責任があるわけではないということを伝えたいのかもしれません。

あるいは、もっと考えを巡らせると、誰かが組織的に、ここだったら逃げられると思って連れてきた可能性もありますよね。それが実現しなかったということなのかもしれません。いずれにせよ、いろんなことをこの絵を見ながら考えることができると思います。

これに対して、ディック・ブルーナの絵本では、滅んでいくものたちに関心がありません。ノアの箱舟とそして雨があります。次のページでは、見開きで雨です。雨粒しか描かれていません。これが、ディック・ブルーナの表現した世界の滅亡です。雨しか降ってない。人間もいない。動物もいない。箱舟さえない。雨しか降ってない。私はこのページを、印象的なページだと思って読みました。何もないということを、雨粒だけで表現しています。とても印象的な、ひょっとすると、滅亡の表現の中では、最も厳しい表現なのかもしれません。

『ルター訳聖書』の挿絵<sup>【図2】</sup>ですが、箱舟が浮かんでおり

ます。ブルーナの絵では竜骨のある舟が書いてありますが、聖書に書いてあるとおりに絵画にすると、このような「箱」になります。そしてこれが、聖書に書いてあるとおりの寸法に基づいています。ただ、窓がないので、厳密に聖書どおりとは言えないかもしれません。

箱だけが浮いていて、周りに人間たちが描かれ、動物たちも海の中で溺れ死んでいきますが、この絵で強調されているのは、箱舟が特別に救われるということよりも、この前面にいるこの2人、男性と女性が頭を抱えたり、あるいは顔を覆ったりして、嘆き悲しんでいる姿が強調されているように、私には思えるのです。つまり、自分の犯してきた悪いことについての自覚を持って、それについて深く思いをいたすこと。キリスト教の用語でいうと「悔い改める」というものですが、それこそが重要なのだと、この挿絵は言っているように私には見えます。悔い改めることこそが生き方の転換に結びついて、それで結局、救われる。比喩的に言えば、ノアの箱舟に入る条件になる。そんなふうに、私にはこの絵は見えるのですが、皆様はいかがでしょう。

ここに黒い鳥が居て、木の枝をくわえています。この絵はもともと木版画で後から手彩色をしましたので、元来は色が付いていませんでした。ひょっとしてこの鳥は、白いほう、つまり鳩であるほうが正解なんじゃないかという気がします。塗った人の塗り間違いなのではないかと思うのですが、これも私の解釈です。

同じころのカトリック側、『ウルガタ挿絵入り』<sup>【図7】</sup>は、ま



【図7】『ウルガタ挿絵入り』創世記7章挿絵



た竜骨のある船に戻ってしまいました。この絵でも、やはり沈んでいく動物たちが描かれていますが、動物の数が圧倒的に少ない。描かれているのは人間が中心で、人間はこうやって、例えば岸にたどり着いた女性をこの男性が助けているのでしょうか。向こうでは岩に取りついてはいる男性の姿が見えます。向こうの島にも人間がいるように見えます。

ただ、前景に描かれているのは裸の女性です。裸の女性には幾つか象徴性がある、多分ここでは自然、もしくは、自然の状態の人間を表していると思います。

自然の状態の人間も西洋の絵画では2つの大きな意味があり、ギリシャ的な絵画では、自然のままの人間は美しく、素晴らしく、尊いものとして描かれます。大体そのときは女神の姿で描かれます。一方、キリスト教的な絵画では、自然のままの人間は救われなければならない堕落した存在であると描かれる。女性の皆さんには申しわけありませんが、女性が裸で描かれるときは、そのような含意があります。ここも、救われなければならない人間、自然の代表としてこの女性が描かれているように私には思えます。

ですから、とてもキリスト教的な教えを表す挿絵になったと言えます。この世界が神によって滅ぼされたことよりは、先ほど述べた『ルター訳聖書』もそうですし、この絵でもそうですが、物語をただ昔のお話としてではなく、キリスト教の教えを伝える物語として読んでいますから、人間は救われなければならない。そのためには、人間は悔い改めなければならないという解釈を表す絵として描かれていると読むことができます。だから、この挿絵の描いてある聖書では、人間は悔い改めなければならないと読むように導かれていくといつてよいと思います。

さらに手が込んでいますのが、マクレーン社刊『銅版画挿絵入り聖書』<sup>〔図8〕</sup>です。時代を反映して、マクレーン社の銅版画は非常にドラマチックな絵画が用いられています。洪水で滅んでいく男性、女性そして子どもが描かれていますが、非常に大きなポーズで嘆き悲しんでいる、あるいは女性は生きる力を失ってぐったりとなっています。非常に優れた絵画だと思います。ところがこの絵は人間のそういう



〔図8〕マクレーン社刊『銅版画挿絵入り聖書』創世記8章挿絵

ドラマチックな部分を表しているかということそれだけではない。右の岩の上に何だかわけの分からないのがちらっと描かれている。よく見ると、蛇です。

蛇は、ご存知のように、エデンの園で人間に、食べてはいけないと命じられた実を食べても死なないと言いました（創世記3章4～5節）。この誘いに乗って実を食べてしまったために、人間はエデンの園から追放されることになってしまった。いわゆる人間の「悪」、「罪」の誘因になった存在です。

他の動物が描かれていないところで、わざわざ蛇だけこの絵に描いてあるということは、ドラマチックな様相の人間を描きたかったわけではなく——もちろん表現はそうなっていますが——、この洪水によって滅ぼされるのは人間の「罪」である。あるいは、罪深い人間が滅ぼされるという、とてもキリスト教的な解釈が行われているということです。

新約聖書ペトロの手紙一3章21節で、人間が洪水によって滅ぼされてしまったのは、後の時代のキリスト教徒になるための儀式、洗礼の前触れであると記されています。洗礼を受けることによって罪が赦されるということのシンボルとして洪水物語を読むべきだと、ペトロの手紙の記者は言っているのですが、その線に沿った解釈の絵だと言うことができるかもしれません。

19世紀になると、ギュスターヴ・ドレがちょっと違う観

点から描いています<sup>〔図9〕</sup>。ドレの絵は聖書の挿絵として最初フランス語で出版されましたが、その後、英語にもドイツ語にもなって、今は英語圏で本当に親しまれている挿絵です。そして、聖書を字義どおりに読まなければいけないとする人たちはこのドレの挿絵を高く評価するのですが、それは、教義と絵画の関係をよく知らずにそうしていると思えます。



〔図9〕 ギュスターヴ・ドレによる創世記8章挿絵

ご覧いただきますと、この男性と女性は必死で、自分たちの子どもを岩の上へ差し上げて、何とかしてこの子どもたちだけは救われるようにと努力をしています。虎が自分の子どもを口にくわえて岩の上にあります。虎は、この場合は、自然界の代表として描かれています。下のほうでは男性が恐らく自分の子どもでしょう、抱えて岩のところへやってこうとしています。

この絵を見て、皆さんどう思われますか。この子どもたちが洪水で死んでしまうことは理不尽なことに思えてきませんか。そんなことがあっていいのだろうか、この絵を見て私は思います。聖書には、人間の「悪」によってこういう人たちもみんな洗いざらい死んでしまったと書いてあるのですが、それで良かったのかと、この絵を見ると思うのです。

別の言い方をすると、聖書に書いてあることをそのまま受け取っていいのかという疑問を、挿絵によって投げかけ

られている訳です。「聖書は書いてあるとおりに読まなければならない」のだと主張している人たちがドレの挿絵をとて高く評価するのですが、本当に大丈夫ですかと、意地が悪いですが聞いてみたくなります。

## 4. 洪水の後

洪水が引いた後、地上についての記述は聖書にはありませんが、少し想像力を働かせれば、地上はどのようなであったか考えられます。『ウルガタ挿絵入り』<sup>〔図10〕</sup>では、地上の有様が描かれています。数少ないのですが、動物や人間の死骸、木も根こそぎになってしまっていたりする状況が描かれています。



〔図10〕『ウルガタ挿絵入り』創世記8章挿絵

この絵はそれ以上にとても深刻な絵だと思います。

山の上に箱舟がとまっています。左上、雲の中に神がいます。その部分を拡大しますと、こんなふうになります<sup>〔図11〕</sup>。山の上の部分にノアの箱舟があって、左に神がいます。神が手を上げているのは、祝福するジェスチャーで、ここの中にいる人間たちやこの動物たちのことを特別に心に懸けているということを表していますが、神は箱舟の方しか見ていません。ですから、神が目を向けて配慮す



〔図11〕『ウルガタ挿絵入り』創世記8章挿絵（部分拡大）



るものと、神が目を向けず、配慮もしないものとが、この絵の中では歴然と区別されているのです。

救われる側と救われない側。救われる側は、画面上では上の方のわずかの部分になります。救われない側が大部分ですから、とても嫌な気持ちになります。救われなさい、箱舟へ入りなさいと、絵を描いた人は伝えたかったと思うのですが、現代人の私たちから見ると、その区別そのものが嫌なもので、それを表すこの絵はとても嫌な絵に映ります。救われないほうが多いのかと。作者の意図とは違いますが、現在の私たちにはそういうふうに見える。

ギュスターヴ・ドレは、死屍累々たる谷底を描きます<sup>[図 12]</sup>。真っ暗な谷底に白い鳩が降りていきます。これは、私にはとても厳しい告発の挿絵に見えるのですがいかがでしょう。箱舟に乗ることができて良かったという物語としてこれをとらえてよいのか。それとも、箱舟が救われたときには、これだけの亡くなった人たちがいるという物語として読むか。19 世紀の後半には、聖書の物語をこういう感性で読むことが可能になっていたのです。



〔図 12〕ギュスターヴ・ドレによる創世記 8 章挿絵

## 5. ノアへの約束と「虹」

洪水の後、神はノアに言います。「わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、わたしは、わた

しとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない」(創世記 9 章 14～15 節)。ここから、虹は平和のシンボルとされます。また洪水が終わったことを教えてくれたのは、箱舟から放った鳩でした。オリーブの若枝をくわえて帰ってくる鳩が、平和の象徴とされることは、皆さんもご存知のとおりです。

ところが、どうもやはりこの物語は居心地が悪い。神は 2 度と洪水を起こさないと約束するのですが、その理由についてはこう書いてあります。「人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ」(創世記 8 章 21 節)。だからもう人間は滅ぼさないことにする。洪水を起こすことにした理由は何であったかという、「人間が心に思い計ることは一日中悪いからだ。」だから洪水を起こして人間を滅ぼすことにしたと言って始めた神が、最終的に人が心に思うことは幼いときから悪いからもう洪水は起こさないと。矛盾していませんか。

私のアメリカでの指導教授の解釈によれば、神の「気が変わった」最大の理由は、先ほどのドレの絵のような、洪水が起きた後の地上を見たからだろう。ひどいことをしたと分かったからだろうと。皆さんはどう思われますか。

『ルター訳聖書』の洪水の後の絵です<sup>[図 13]</sup>。箱舟から出たノアとその家族は真っ先に何をしたかという、神に犠牲を捧げました。聖書の中の「犠牲」は、実際に動物を火



〔図 13〕『ルター訳聖書』創世記 9 章挿絵

の上にくべて焼く行為を指します。メソポタミアでも、パレスチナでも、それを食物として神が受け取ると考えられていたからです。犠牲の肉を焼くとてもよいにおいを嗅いで、神は心の中に洪水は2度と起こさないと誓ったと書いてあります。

洪水を起こさないしるしとして「虹」を起こした。「虹」と訳されている言葉はヘブライ語では「弓」を表しますから、「弓を置いた」、つまり、もはや戦いを起こさないことにしたと解釈されています。

真ん中にひざまずいているのが、ノアと3人の息子たちです。手を合わせているのは祈っているしるしで、上のほうに、神が居て、王冠は着けていませんが、手に“orb”と呼ばれる、地球をあらわす球体の上に十字架が載っているものを持っていて、宇宙の支配者であることを示しています。おもしろいのは、聖書には動物を燃やして犠牲にしたと書いてあるのに、ここには描かれてない。『ウルガタ挿絵入り』<sup>[図14]</sup>の絵と比べると、違いは歴然としています。こちらは動物を燃やしています。

このころ「犠牲」をめぐる、プロテスタントとカトリックの陣営の間に大論争がありました。イエス・キリストが、「最後の晩餐」でパンとブドウ酒を分け合う儀式を制定した。ここまではプロテスタントもカトリックも一緒なのですが、何が違うかというと、カトリックではこの儀式はイエス・キリストの犠牲を再現するものと解釈していて、プロテス

タントではイエス・キリストの犠牲は再現されないと考えていたのです。その論争がここに反映されていると私は思います。ですからプロテスタントの『ルター訳聖書』では、ノアは犠牲を捧げていません。神に向かって祈っている。カトリック側では、犠牲はずっと捧げられ続けると考えるから、『ウルガタ挿絵入り』のように犠牲を描かないといけない。

これらに比べると、マクレーン社刊『銅版画挿絵入り聖書』<sup>[図15]</sup>の絵はやはり劇的です。手を上げて大きなポーズで上を見ているノアと、ものすごく湾曲した姿勢で祈っているノアの家族たちが描かれていて、神は描かれていませんが、犠牲の炎がほんのわずかに向こうのほうにだけちらっと見えるのと、ここが犠牲を捧げている場面であるというのが分かるように、木を切った斧と、犠牲の頸動脈を切ったナイフが置いてあります。このようにして、犠牲が捧げられているということが、非常に間接的な表現で描かれています。それよりもノアの大仰なポーズに、私たちの目は行くように描かれています。

ノアは、その後ブドウ畑を作って、ワインを作って酔っぱらってしまうという不思議な逸話がこの洪水物語の後に続いています(創世記9章20～27節)。どんな人間も英雄視されない。どんなに立派な人でも必ず悪いところがある、弱いところもあることを赤裸々に書くのがヘブライ語聖書の特徴だと思っていますが、このエピソードも人間ノアの弱さ



〔図14〕『ウルガタ挿絵入り』創世記9章挿絵



〔図15〕マクレーン社刊『銅版画挿絵入り聖書』創世記9章挿絵

として読めると思います。描かれることの少ないこの場面が、『ルター訳聖書』の挿絵にはありました<sup>[図13]</sup>。右側の画面では、酔っぱらって寝ているノアを見ることができます。聖書の言葉で言えば、裸を見ているのは、一番左端に立っているハムの長男、カナンです。彼が見つけたので、それを聞いたセムとヤベテが父親の裸を見ないようにして布をかけてやるという場面です。

目が覚めた後にこのことを知ったノアは、ハムとカナンをとても厳しい言葉で呪います。ドレの版画<sup>[図16]</sup>では、わざわざハムとカナンの追放の場面を1枚描いています。これをこんな大ききで描く絵は他にはありません。何だかよく分からない物語ですが、わざわざこの場面を、この1枚大きな絵で描いている。これを、ドレはどんなつもりで描いたのでしょうか。

読みようによっては、救われる者と救われない者を分けていく、そういうモチーフがずっと続いていると読むこともできると思いますが、そういう場面をわざわざ選んで描いているのは、ドレがそれに賛成していたからなのか、それともそういう考え方に批判的であったからなのか。本当のところはよく分かりませんが、ドレは、聖書挿絵で描かれることが少ない場面を選んで描いているように思えます。理由の1つとしては、それまでの作品に縛られないで自分のイマジネーションで絵を描くことができたからだと考えら

れます。また、今まで絵に描かれることの少なかった場面は、実は、解釈に困ったり、あるいはキリスト教にとっては都合の悪い場面だったりするのです。そこをわざわざ描いていくところに、ドレの聖書挿絵の非常に刺激的な性格があります。

## おわりに～聖書の物語と絵画

以上、駆け足でしたが、今回展示しているものを主にして、聖書の挿絵と物語の関係について少しお話をしてきました。

聖書には物語としての普遍性があると、私は思っています。もちろん、文化的、あるいは歴史的な隔たりがありますので、物語を読むには基本的な知識を持っている必要はあります。しかし、そういう知識を持っていれば、聖書そのものは普遍的な物語であるといつてよいと思います。一言で言えば、人間というもの、人間の良い面も悪い面も、大変赤裸々に描かれているのが聖書という書物です。ですから、私は、物語としての側面に注目して、物語として解釈をすることを、自分の研究の主題としているのです。

普遍的な物語であるということは、読み手がさまざまな解釈をすることができるということでもあります。ある一定の解釈に縛られない。もちろんある程度制限されてはいますが、読み手には解釈する自由があります。それに対して、最初にも申し上げたように、キリスト教は正しい読み方があるとして、コントロールしようとしてきた歴史を持っています。正しい読み方をしていない人たちのことを、キリスト教の用語で言えば「異端」と呼んできました。

でも、「正しい読み方」とはどういうものなのかということは考える必要があると思います。例えば、それは歴史学における正しさとは違います。歴史学における正しさは一定の基準があると思いますが、信仰や信条、思想に関するものの正しさはどこにあるのか。それは誰がコントロールする権利を持っているのかということが、特に20世紀後半大きく問われてきました。

一方で、画家は、教会に買ってもらうために、コントロールされた、「正しい読み方」を絵画に表現しようとしてきま



[図16] ギュスターヴ・ドレによる創世記9章挿絵



した。他方、カラヴァッジョの絵に関する逸話が示すように、時にキリスト教のコントロールから外れて自由に物語を解釈して、びっくりするような側面を物語に見つけて、私たちにそれを示してくれています。

聖書に挿絵を入れるのは良い面と悪い面の両方があります。良い面というのは、やはり理解の助けになります。分かりにくい物語の場面を絵にしてくれることで、イメージを持つことができます。私たちが知らない文物を絵に描いてくれることで、それに対する理解を持つことができます。

ところが同時に、絵は解釈そのものですから、その解釈が読み手の解釈を縛る可能性があるわけです。これが、悪い面です。しかし、挿絵が解釈を縛る可能性があるからこそ、初めてドイツ語に訳されたルターの聖書には挿絵があったわけです。この読み方で読んでください、この見方で聖書の本文を解釈してくださいということで入れられていたわけです。後には、これが注という形で入れられます。今回展示している聖書の中で最も注が多いのはジュネーヴ聖書ですが、たくさんの注を欄外に書き込むことによって、聖書はこういうふうに読みましょうという解釈を提示しました。『ルター訳聖書』の挿絵も、目的は同じだと言えます。その目的は、画家のイマジネーションによって達成されました。読む者のイマジネーションが縛られるという形で。

ところが別の面から見ると、必ずしもキリスト教のコントロールどおりに描かれてない絵もあって、こんなことが考えられるのかと読む側はこれまで聞いてきた物語と違うと感ずることができる。これまでとは全く違う読み方を聖書に対してできるようになる、プラスの面も持っていると思います。

うまく使うことができれば、こういう絵画や、映画やその他の作品も含めて、芸術作品によって解釈された聖書の物語に触れることで、今度は自分の想像力で聖書を読むことが促される。これまで聞いてきたことと違う読み方も可能なのだということを感じ、元になった聖書の物語にもう一度立ち返って読み直すことができる。そういう力を与えてくれるのが絵画、芸術ではないかと思います。

もちろん物語そのものについての知識や見識、さらには、

芸術作品についての知識や見識が求められることは言うまでもありませんが、それらをうまく突き合わせていくことで新しい解釈をすることができる。もう一度自分の想像力を使って読むことを促されるのではないかと思います。

ご清聴、ありがとうございました。

(文中の聖書の引用は、日本聖書協会『聖書 新共同訳』による。)

#### 水野 隆一 (みずの りゅういち)

関西学院大学神学研究科・神学部教授。関西学院大学博士(神学)。前神学部長。キリスト教と文化研究センター長。

『アブラハム物語を読むー文芸批評的アプローチ』、『新共同訳聖書註解 旧約聖書・旧約統編I』に「ヨセフ物語(創世記 37～50章)」、『新共同訳旧約聖書略解』に「エズラ記」「ネヘミヤ記」「雅歌」を執筆。関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『キリスト教平和学事典』編集委員、同センター編『平和創造への道』に「ヘブライ語聖書は「平和」について何を語るか」を執筆。訳書に、スロントヴァイト著『現代聖書註解 エズラ記・ネヘミヤ記』、『現代聖書註解 雅歌』、『世界の礼拝ーシンフォニア・エキユメニカ式文集』(共訳)。